

黄宗羲と山田方谷の養気觀

難波征男

一、黄宗羲と山田方谷

ここに登場する黄宗羲と山田方谷とは、当人相互の直接的な関係はない。明末清初の黄宗羲（一六一〇～一六九五）と、幕末維新の山田方谷（一八〇五～一八七七）との間には約二百年の時間的隔たりがあり、また活躍した舞台も中国と日本と相異っている。しかし、両者の間には不思議なほど類似した所が多い。ここでは、その幾つかを見ておこう。

（一）先ず兩人が活躍した時代状況が類似しており、その中で提起される歴史的課題も近似している。

宗羲が活躍した明末清初は、大局的には漢族の明朝が崩壊して、滿族の清朝の支配下に没落していく。圧倒的多数を誇る漢族は、少数異民族の外圧によって圧倒され、やがて征服される。宗羲は、その悲痛な時代動向の中で、社会的道義を主張する東林学派の幹部であった父に育てられ、若いときから経世家としての意識を強く持っていた。清朝に対する抵抗闘争が終焉し、遺民としてではあっても、比較的安静な時間を得た段階になると、彼は漢族本来の民族性とは何か、また将来の復興期に継承すべき漢族文化は何かを根本から問い直さなければならなかったであ

ろう。「三代より以後、天下を乱す者は夷狄に如く者はなし」(『留書』封建)とは、辮髪の強制等、異文化異風俗を押し付けられていた苦衷から発せられたものである。彼の大著『明儒学案』『明夷待訪録』等はそのような状況下から解放された時、未来に建設すべき理想社会や漢族の本来のあり方を、今から展望して書き残さずにはいられなかつた遺書であつた。「後の人、もし吾が言によつてこれを行う者あらば、また何ぞ吾、みずからその言を行うに異ならん」(『同上』自序)とは、それを端的に吐露したものであろう。つまり、宗義の前半生は、腐敗政権を改革して明王朝を再建する闘争や、異民族侵略者に対する抵抗闘争に明け暮れたもので、彼は明末を代表する戦闘的経世家であつたと言えるであらう。

一方、方谷は幕末期、財政が破綻していた松山藩政を立て直した幕末維新期を代表する経世家であつた。その後、徳川幕府中枢の老中に抜擢された主君・板倉勝静の補佐役として、彼は江戸に進出して来た。しかし、勝静と方谷の主従を迎えた徳川幕府の状況は、欧米列強から門戸開放を突きつけられ、開国か攘夷か、勤皇か佐幕か、挙国一致による中央集権か、従来の封建制保持による地方分権か等の外患内憂、難問山積で絶体絶命の窮地に置かれていた。やがて、幕藩体制は崩壊し、大政奉還によつて徳川幕府は壊滅することになる。この動乱の中で、方谷が補佐した勝静は、幕府側から日本国の方向を先導した最後の老中の中心人物であつたが、彼の実践的理論的指南役が方谷であつたのである。この面から言えば、方谷は幕末最後期の最も重要な経世家の一人であつたと言えるであらう。以上のように宗義と方谷の両者は、壊滅前後の王朝や幕府を最後まで支えた当世の代表的経世家であつたと言える。

(2) 次に両者は、宋明新儒学について博く深い学識を有しており、朱子学にも陽明学にも通じていたが、その思

想的立場は朱子学というよりも陽明学的傾向が強い儒学者であった。しかも、両者に共通する特徴は、陽明学を「氣」の立場から再認識しなおして、それぞれの養気説を提起していることである。

王陽明の人間観である「心即理」に対して、宗羲は「心即氣」^①を主張しているが、「心には本体なし。工夫の至る所、即ちその本体なり」^②と心の工夫を重視して、「養気は即ちこれ養心なり」^③と言う。このように、宗羲は養気の工夫を主張した思想を提起している。片や方谷も、「王子の学は、良知より悟入すと雖も、蓋しその本源は孟子の養気に出るのみ」^④「王学の大旨は、養気一章を出ず。これを目して、養気学と為す」^⑤と、養気学を宣言しているのである。両者はそれぞれ、明末清初と幕末維新期の代表的な陽明学者であるが、また彼らの陽明学は養気を重んじた陽明学という面で類似しているのである。

第三に注目すべきなのは、両者がそれぞれ、独自の儒学思想を大悟した後、その思想的境地を『孟子』をテキストにして説いている事である。宗羲はその著に『孟子師説』と題して、わざわざ恩師劉宗周の見解を紹介するという形式をとり、この説に重みをつけている。

また、方谷は最晩年に少数の弟子に向かって解説した講義録が著書として保存されているのであるが、それが「孟子養気章講義」^⑥「孟子講説」^⑦「孟子養気章或問函解」^⑧である。また同じく晩年の「師門問弁録」^⑨中にも『孟子』に関する方谷の見解を散見することができる。方谷の本講義の序文^⑩から、当時の彼の思想的立場や、この講義への意気込みを読み取ることができる。

孟子養気の章を講ずるに、専ら余姚王子の旨を奉じて、朱註にしたが遵はず。恐らく聴く者は疑い多からん。これ

が図解を作り、以てその旨を明らかにせん。然れども、その源を究めてその流れを詳しくみるに非ざれば、以て疑いを釈とくに足らず。よつて更に或問数条を作つて、その端に置く。図を観る者、先ずこれを読まば、則ちそれ惑はざるに庶ちかからん。

第四に、両者は最晩年、書院や郷学で後継者を育成することに情熱を傾注している。宗義は寧波における甬上証人書院であるが、これは宋明儒学と清朝考証学を連結し、浙東史学の基礎になつて行く画期的な学風を作成した。方谷のこの講義は、明治六（一八七三）年の冬、備前和氣郡木谷村の閑谷精舎で行われたが、この校舎は、元禄一五（一七〇二）年に岡山藩主池田光政が創建した庶民教育の郷学・閑谷学校である。廃藩置県にもなつて明治三年（一八七〇）閉鎖されたが、再興運動が起こり、この年になつて閑谷精舎の名で再開し、方谷を講師に招いたのである。

方谷と宗義は、晩年、後学養成の教育に熱心であつた。しかも、その中から次代の重要人物を輩出していることも共通している。^⑩

以上から推察できるであろうが、宗義と方谷の間には、①動乱期を闘つた経世家、②養気説による独自の陽明学を提唱した新儒学者、③『孟子』をテキストにして自己晩年の思想的境地を説いた思想家、④最晩年、書院や学校で後継者の育成や新学問の開拓に努力した教育家等、着目すべき類似性を認めることができる。^⑪

本論では、これらを勘案しながら、彼らの養気説を考察してみたい。

実はこの作業に取り組んでみて、方谷の「孟子養気章講義」が比較的容易に理解できるものであることに気が付

いた。それは多分、方谷の講義準備が万全であり、それを記録した弟子たちが優秀で、学習姿勢が誠実であつたためであろうと推察できる。そこで、ここでは方谷の養気学を下敷きにして、宗羲の『孟子師説』を解説してこうと思う。先ず、方谷の養気学の検討から始めよう。

二、山田方谷の『孟子』養気学

【I】養気学の成立

方谷晩年の門人・岡本魏は、『孟子養気章或問図解』を校訂し、さらにその序文を書いている。この中で、方谷の思想的特徴や本書成立の経過を次のように述べている。

先生の学もまた宗旨あり。何をか宗旨と謂う。一氣の自然に従ふこれなり。蓋し先生、晩年、大いに斯の道に独悟自得する所あり。常に及門の諸士に示して曰く、「宇宙間は一大氣のみ。唯だこの氣あり。故にこの理を生ず。氣、理を生ずるなり。理、氣を制するに非ざるなり。故に人、克よく一氣の自然に従へば、則ち仁と為り義と為り礼と為り智と為り、万変の条理随つて生ず。これはこれ聖門の真血脈なり。豈に氣の上に別に理を加ふ可けんや。

然れども、洙泗の学絶えて、而して濂洛の学興りしより、その学は理を以て主と為し、理は氣を制して、而して理と氣とはおのずから判るわか。而してその謂はゆる理は人の思索構成に出で、而して氣中の自然の条理に非ざるなり。明の餘姚の王子出づるに及び、その学独り氣を以て主と為す。ここに於いて聖門の道、始めて燦然

として世に明らかなり」と。

これ先生の教伝の大略なり。故に先生は晩年、最も王子の学を崇信す。又、嘗て魏等從遊の士に謂つて曰く、「王子の学は、良知より悟入すと雖ども、蓋しその本源は孟子の養氣に出づるのみ」と。ここを以て魏は嘗て同門の友と先生に謂うに養氣章の講説を以てす。先生は莞爾かんじとして頷容がんとようし、直に講筵たんだちを開き、詳講精説し、以てその蘊奥うんおうを尽くす。然れども、尚ほその惑ひあらんことを恐れ、更に、或問あきもん図解ずげを作りて、以てその旨を明らかにす。この篇、即ちこれなり。

これによつて、養氣学が方谷晩年の大悟による思想であり、当時横行していた朱子学の理氣論を百八十度、轉換して王陽明の主氣論に道を開くものであることが明らかになつたであらう。しかも重要なことは、方谷はこの陽明学にも満足できないで、「王子の学は、良知より悟入すと雖ども、蓋しその本源は孟子の養氣に出づるのみ」と、陽明学の淵源を孟子の養氣説に認めることによつて、陽明の致良知説を養氣説によつて独悟自得し再解釈していることである。それによつて、方谷は独自の方谷学と言うべき養氣学を提唱しているのである。

門弟からの養氣学講義の要請を、方谷が「莞爾」として頷容がんとようしたのには言うまでもないことであらうが、伝授の際に生起するであろう誤解を恐れて、わざわざ「或問」や「図解」まで準備して講義に臨んでいる。それは、方谷個人の学問が次世代へ継承されんとする個人的悦樂の情をはるかに超えている。それよりも、幕藩体制が倒壊し日本中が挙げて文明開化へ急行し、伝統文化はその足場を見失つて、近代化の奔流に飲み込まれんとする時代状況に対して、強い危惧と危機感を覚えていた、その憂国の情がそうさせたのではなからうか。そして、そのような中における最後の砦ともいえる養氣学の果たす使命を自覚し、その養氣学を説く最後の機会を確実に成就せんとする強い

決意が、ここに認められるのではなからうか。

【II】方谷晩年の大悟——一氣の自然に従う道——

晩年の門弟・岡本魏はここで、方谷の養気学の宗旨は「一氣の自然に従ふ、これなり」として、「故に人、克よく一氣の自然に従へば、則ち仁と為り義と為り礼と為り智と為り、万変の条理随つて生ず。これはこれ聖門の真血脈なり」と指摘している。それでは、先ず方谷の説く「一氣の自然に従ふ」という時の「一氣」とは、どのようなものかを見ておこう。

その氣と云ふは形はなけれども、我体に充て居り、頭のぎりぎりより足の指のさき迄一ぱいに積んで居る、故に生きて働くは皆氣なり。体は四体を云ふなれども、形全体を云ふ。此この体と云ふも、畢竟氣の凝結するなり。故に形が直に氣なり。禽獸草木みな氣なり、それが枯れて終には影もなくなるは、即ち元の氣の復するなり。故に形があれば其れ相應の働きがある、皆氣なり。即ち心の中の氣なり。此は人のみにあらず、天地四海も皆氣なり。

（「孟子養気章講義」志氣之師也節）

方谷によれば、人も禽獸草木も天地の万物はすべて氣からできているが、この氣には特定の形がない。しかし、具体的な存在物には、あらゆるものに必ず個別的特殊的な形があり、これに充滿している氣は活物であるから、その形に相應した働きをさせる生命活動を賦与する。故に足に充滿した氣は足の働きをし、手に充滿した氣は手の働きをする。禽獸に充滿した氣は禽獸の働きをし、人に充滿した氣は人の働きをするというわけである。

とすれば、その自然の形に順応した働きができれば、それが自然の気の働きであるから、そこには何らの障害もなく、自由に理想的な働きをすることができる。

しかし、現実の世界では、千差万別の形がある故に、Aの形とBの形が衝突し、Aの形に従うAの心とBの形に従うBの心がぶつかりあう。このようにして身心は障害にぶつかり、身心の働きは自由ではなく、常に戦戦兢兢として、時には主体性を喪失して他者の奴隷になっていることもある。ここに、『孟子』養気章で問題にしているように不動心を養う課題が現実性を帯びて浮上してくるのである。不動心を得るための究極の修養法は、孟子によれば浩然の気を養うことである。方谷は、『孟子』養気章の「敢問、何謂浩然之氣。曰難言也。其為氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞乎天地之間」の中の「以直養而無害」を従来、多くの学者が行っているように「直を以て養う、而して害なし」と訓読することに反対して、「以て直養すれば、而して害なし」と訓読して、浩然の気を直養することを主張している。

人は浩然の気を養はねばならぬ。これが学問工夫の肝要なる所なり。それを推しつめて言へば、只直の一字のみ。総体、一大元氣が自然に運動して、それが結んで万物となる。万物となれば、その形に従うて運動がある。その形の中でも、それぞれ運動が差う、況や形の異なるものをや。故に人間は生れば、人間丈の運動がある、これ皆大氣の運動なり。その生のまま自然の運動通りに行けば、これが直なり。直なれば自然に条理に当たるなり。これが所謂直養なり。もし邪知にて巧に細工拵へごちなせば、直養に非ず。そして養は只一度丈けすれば是なりと言ふに非ず、日に三度食する如く、日夜朝暮、間断なく為す、これが養気なり。

（『孟子養気章講義』敢問浩然之氣節）

曰く、何をか（養気の）道と謂ふやと。曰く、直養、これのみ。万物の化生するは、一大氣を同じくす。然れども人も物も形に流れ、各の不同あり。知覚運動も亦た従つて異なる。ここに於いてか、自然に条理あり。その自然に従つて、条理を害するなきは、則ち大氣と合一せば、これを直養と謂う。自然に従はずして、条理背戻せば、これを不直と謂う。物の氣を得るや、偏なり。故に知覚運動も、その形に局せらる。唯だその自然に従ふもののみ、その直たるを害せざるなり。人の氣を得るや、全し。故に智は万物に周ねくして、行は為さざるなし。ここを以て多岐横出し、尽くは自然に従ふ能はざれば、直あり、不直あり。直と不直とは、善悪吉凶の由て分るる所、治乱存亡の由て起こる所なり。これその養の道を害する者なり。戒めざるべからず。

ここで方谷は、「自然に条理あり」と大悟している。その自然の条理は、人や物に充滿している氣が本来備えている条理であるが、人や物は生まれながらにして個別的特殊的な形態を具えて生存している。その知覚運動の流動も個別的特殊的になる。言い換えれば、その知覚運動の具体的流動が、氣の流行であるから、そこには自然の条理が固有されている。氣は具体的な個別的特殊的な形に従つて流行するから、自然の条理も随時随所に個別的特殊的な形を具体的に現す。つまり、方谷が「自然に条理あり」という「条理」は形の知覚運動に従つて変動する流行する条理であつた。方谷は、このような「自然の条理」を直養せよと教示しているのである。

方谷の「孟子養気章講義」志氣之師也節によれば、「心の知覚するは即ち氣の働きなり。総て云へば矢張り心も皆氣なり。氣の外に心あるにあらず」と説明している。ここで、方谷は、氣と形、養氣と知覚運動の關係に論及する。

天地万物は一大気のみ。而して気は活物なり。万物に心あれば、おのずから能く知覚す。身あれば、おのずから能く運動す。知覚運動は、頃刻も息まらずして、その気を養う所以なり。一日すらも養はざれば、何を以てか能く生活せん。

唯だ人のみ然りと為すにあらず。飛ぶものも走るものも動も植も、皆、然らざるものなし。故に養気の道は、天地と俱に生じ、万物は同じく有せり。

(「孟子養気章或問図解」)

方谷の「自然に条理あり」は、気の運行に条理があることを論拠にしている。人も物もこのような気によって構成されているから、すべての存在物には生来、「条理」が固有されている。また、気は形によって具体化するから、具体的形の知覚運動そのものが気の具体的運行であると考えられる。故に告子のように性急に不動心を求めて、心の知覚と気の運行を分断することは不可能である。それは、孟子が主張しているように身心の知覚運動はその気の具現化した形である。気の「自然の条理」を体現すれば、それが「義」であり、「義」を実践に移す筋道や方策を示す「道」であろう。もし、「自然の条理」を逸脱すれば、不義になり、道から外れることになる。その分岐の要は気を直養するか否かにかかっている。

方谷は、そこで心の知覚と気を分離して「義襲」を説いた告子を批判し、心身の知覚運動が「義と道に配す」ことによって、浩然の気が養なわれるとする孟子の「集義」に賛同している。この心身と気との関係、「集義」の知覚運動と養気との関係は、宗羲の「心即気」「養気即是養心」説と類似したものと言えるのではなからうか。宗羲は、『孟子師説』浩然章で次のように述べている。

天地の間には只だ一気の充周あるのみにして、人を生じ物を生ず。人はこの気を稟けて以て生ずれば、心は即ち気の霊なる処、所謂（『礼記』礼運篇の）「知気は上に在り」なり。心体は流行す。その流行して条理ある者、即ち性なり。猶ほ四時の気、和すれば則ち春となり、和盛んにして温かくなれば則ち夏となり、温かさ衰へて涼しくなれば則ち秋となり、涼しさ盛んにして寒くなれば則ち冬となり、寒さ衰へれば則ち復た春となる。万古、かくの如し。もし間に界限あらば、流行してその序を失はざるは、即ち理なり。理は見る可からざれば、これを氣に見る。性は見る可からざれば、これを心に見る。心は即ち気なり。心、その養を失はば、則ち狂瀾横溢し、流行し而してその序を失ふなり。養気は即ちこれ養心なり。然れども、養心を言はば、猶ほ把捉し難きを覚ゆ。養気を言はば、則ち動作の威儀、且昼の呼吸、実に持循すべきなり。……

人身は一気の流行なり。流行の中に、必ず主宰あり。主宰は、流行の外に在らず、即ち流行にこれ条理ある者なり。その変ずる者よりしてこれを觀れば、これを流行と謂う。その不変なる者よりしてこれを觀れば、これを主宰と謂う。氣を養う者は主宰をして常に存せしむれば、則ち血氣化して義理と為る。その主宰を失なば、則ち義理化して血氣と為る。差^なう所は毫厘の間に在り。

宗羲の「人身は一気の流行なり。流行の中に、必ず主宰あり。主宰は、流行の外に在らず、即ち流行にこれ条理ある者なり」とは、方谷の「自然に条理あり」である。また、宗羲の「養気は即ちこれ養心なり。然れども、養心を言はば、猶ほ把捉し難きを覚ゆ。養気を言はば、則ち動作の威儀、且昼の呼吸、実に持循すべきなり」は、方谷の直養の工夫であると言えるであろう。

方谷の「人、克く一気の自然に従へば、則ち仁と為り義と為り礼と為り智と為り、万変の条理随つて生ず。これ

はこれ聖門の真血脈なり」という主張と、宗羲の「養気は主宰をして常に存せしむれば、則ち血気化して義理と為る。その主宰を失はば、即ち義理化して血気と為る」という体認は、養気の工夫で兩人が体得した貴重な効験である。

以上、方谷と宗羲の思想をすり合わせながら、養気説の実態を検討してきた。最後に、宗羲が心即気の人間観から観た『孟子』の四端説に対する解釈を観ておきたい。ここに孟子が最も力を入れて論難した告子の人間観と孟子の人間観との相異を明白に説明していると考えるからである。

四端も外に何に従よつてか性を見ん。仁義礼智の名は、四端に因よつて後有り。四端の前に、先に一つの仁義礼智なるものの、中うちに在るに非ざるなり。(『孟子師説』卷二「人皆有不忍人之心」章)

注、

- ① 黄宗羲『孟子師説』卷二「浩然」章。
- ② 黄宗羲『明儒学案』黄梨洲原序。
- ③ 黄宗羲『孟子師説』卷二「浩然」章。
- ④ 山田方谷「孟子養気章或問函解に序す」
- ⑤ 山田方谷「孟子養気章或問函解」
- ⑥ 『山田方谷全集』第一冊所収
- ⑦ 『山田方谷全集』第一冊所収
- ⑧ 『山田方谷全集』第二冊所収

- ⑨ 『山田方谷全集』第二冊所収
- ⑩ 「孟子養気章或問図解」
- ⑪ 宗羲の後学には万斯同、李杲堂等があり、方谷にも二松学舎を開設した三島中洲等がいる。
- ⑫ 岡田武彦「新儒教の日本的受容」(『中国思想における理想と現実』所収)には、「日本の陽明学も幕末に至って深蜜切実なものとなった。其れは当時の朱子学者と同じく、特に動乱期に処して深刻な体認の学を旨とした明末清初の新朱子学、新陽明学をよく受容して深潜縝蜜な体認を本とする心性の学につとめたからである」と指摘している。幕末維新期の山田方谷と明末清初期の黄宗羲の類似性はこの辺にあつたかも知れない。

(科学研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成・中国思想文献の近世日本社会への伝来とその流通―新儒教と医学思想の文献を中心として―」の助成による成果の一部である)